

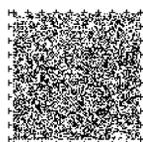
アンディ・ウォーホル

《6枚組の自画像》 1966

1949年頃から本名のアンドリュー・ウォーホラではなく「アンディ・ウォーホル」を名乗るようになり、そのキャラクターを意識的に演じるようになります。1960年代からシルクスクリーンという印刷技法を使い、著名人などの画像を反復して刷るようになるのですが、この作品では当時すでにカリスマ的存在となっていたウォーホル自身の画像が使われています。

彼は当時「アンディ・ウォーホル」について知りたければ彼の作品や彼自身を見ればよい、とコメントしています。あなたには今どんなウォーホルが見えていますか。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフF

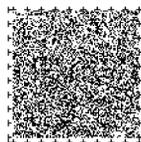


## 森村泰昌 《肖像（少年 1,2,3）》 1988

皆さんには変身願望はありませんか？ 森村は著名人や名画の登場人物になりきり自身のポートレートを作成し続けている作家です。この作品をどこかで見たことのある方もいるかもしれません。そうです。マネの《笛を吹く少年》（オルセー美術館所蔵）を森村自身が演じている作品です。左端の一枚はたしかに似せて撮影したのですが、後の二枚はズボンをおろして名画が台無しです。なぜこのような連作にしたのでしょうか？ 森村は「本物とのズレをいかにして見出すか」ということを常に考えているそうです。何に気づき、何を表現したかったのか、一緒に考えてみませんか。



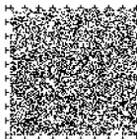
ガイドスタッフ S

音声コード  
Uni-Voice

## 横山裕一 《野獣とわたしたち》 2005-2007

色鮮やかな 187 点で構成される作品です。タイトルは《野獣とわたしたち》。どれが野獣でどれが私達なのでしょう。横山さんの作品には度々、人間とも動物とも見分けがつかない面々が登場します。ここにも、そんな面々を思わせる様な肖像が並びます。壁に広がる彼らに向き合い、あなたはどうぞ覧になるでしょう。1枚1枚じっくり見て想像を膨らませたり。似たもののグループを探したり。でも簡単にグループ分けできないなと呟いたり。今日の自分を見つけたり。世界の縮図の様にも思えるこの作品。向き合う度、見方も印象も変わりそうです。

音声コード  
Uni-Voice



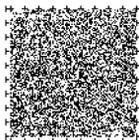
ガイドスタッフ M

## 開発好明 《インタビュー》 2001

首をかしげたり、口ごもったりしながらインタビューに答える現代美術家・開発好明氏。色んな仕草、色んな表情…をしています。どれも開発好明。それはまるで、画面後ろ、向こうの方に見えている巨匠 A・ウォーホルの自画像六変化のようでもあります。それにしてもこのインタビュー、真剣に見れば見るほど何を言わんとしているのかよく分からずモヤモヤしませんか？

しかし！自分もまたこんな風な「独りよがり全開の対話」で知らず知らず相手を困らせているのかも…。じわり冷や汗。これぞ開発好明作品マジック?! なのではないでしょうか。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y



## 池内晶子

Knotted Thread -sakura-pink -h.220cm -west-northwest  
- east-southeast (distance of 50cm)

（結ばれた糸、桜色、高さ 220cm、西北西一東南東、間の距離 50cm） 2023/2025

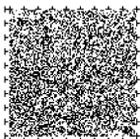
桜色の絹糸からつくられた作品です。特別な道具を使わず、糸にすきまなく結び目をつくり、その糸が3階あたりから床まで長く続いています。よく見ると作品の設置が難しそうなのにまで、糸がありますね！

じつは、この糸の支点となる「方位」がタイトルになっています。また、作品は室内に展示されていますが、大きな窓の近くにあるため、外の天候や時間帯によって見え方が大きく変化し、近くを人が通ると、その風で糸がゆらゆらと動きます。

作品と人、そして空間のつながりが、無数の結び目のようにやさしく結ばれている作品です。

音声コード

Uni-Voice



ガイドスタッフ M



アルナルド・ポモドーロ

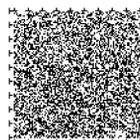
《太陽のジャイロスコープ》 1988



ガイドスタッフI

ジャイロスコープは船や飛行機の針路を定める時に使われる道具です。絶対の安定性と信頼性が求められます。作品を見てみましょう。とても力強く、合理性を感じます。でも気付きましたか。そこにある鋭い裂け目に。作者のポモドーロによれば、この裂け目は深層意識を表現しているのだそうです。合理性と深層意識が共存しています。この作品を見ると私は自分の人生を思います。岐路に立ち人生の針路を定める時には合理的な判断を心がけ、人生を送ってきたように思うのですが、そうでなかったこともあるなど。それは、それでよかったなど。

音声コード  
Uni-Voice

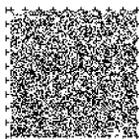


オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング》について

真っ白なカンヴァスに描かれたインストラクション（指示）。テキストのみのシンプルな作品ですが、目に入った瞬間、何かイメージが湧いてきませんか？具体的なモチーフがあるペインティング（絵画）とは違い、この作品が鑑賞者に与えるイメージは一人ひとり異なります。ある意味、この作品は私たちの頭の中で初めて完成するとも言えるのではないのでしょうか。普段見過ごしてしまいがちな日常のモノや光景も、この切り取られたテキストのように、ふと意識を向けてみることで、新しい見え方が生まれてくるかもしれません。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ F



鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音（おとだて）」 and "nozo mi"》

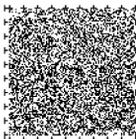
2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれません。が、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについてみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフY

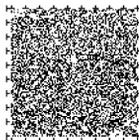


## 文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。

音声コード  
Uni-Voice



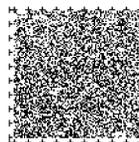
ガイドスタッフ〇

## 多田美波 《相 (Phase)》 1989

まわりをゆっくり一周してみてください。突然自分が映ってびっくり。これ、ただのガラスじゃないんです。多田美波が1968年に制作した皇居新宮殿のシャンデリアに求められたのは100年の耐久性。それをきっかけに多田はガラスを勉強しました。約20年後、ガラスという素材を熟知した作家が制作したのがこちら。ビルの外壁などに使われる熱線反射ガラスを使用し、屋外設置も可能です。実際、当館に来る前は海辺に置かれたことも。潮騒を聞きまばゆい太陽を浴びたガラスはこの場所でどんな光を放つのでしょうか。



ガイドスタッフ M

音声コード  
Uni-Voice

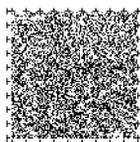
宮島達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものと関係を結ぶ  
それは永遠に続く》 1998

数字が碁盤の目のように並び、それぞれ・さまざまな速度で絶え間なく変化しています。無機質なデジタルカウンターの集まりでありながら、1～9と刻み一旦消えるのを繰り返す赤い光は血の通った一つひとつの生命のように見えます。一面に広がるその様を眺めていると、社会の縮図のようにも感じます。

9と1の間に、闇が現れます。それは「0」と名付けられることはありません。生命の終わりなのか、新たな始まりの前なのか、あなたにはどう見えるでしょうか。この部屋で、本作品をじっくり見つめながら思いを巡らせてみてください。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ T

